

春燈

1月号

January 2012



主宰の句

安立公彦

故山めく信濃や雁の夜はことに

青空に桐の実乾ぶ旅愁かな

秋惜しむかに細波の千曲川

しぐるるや浅間いづこと辻に立つ

前ゆくは辰雄犀星しぐれ径



成瀬櫻桃子の句

むさしのの一番星や鳥総松

「春燈」昭和五十七年

新年も五日を過ぎると、家々での松納めが始まって、そのあとには「鳥総松」が立つ。この、とぶさ松、その土地に依って多少の違いはあるかも知れないが、先ずは門松の腰に使っていた黒松の、しっかりした小枝を選んで、その門松のあった場所に挿す。それだけのことだったが、これにて、正月の大切な行事の一つを果たせたと、胸を張っていた。少年の頃の私の思い出である。

太田 具隆

成瀬櫻桃子の句

万太郎忌敦の牡丹開きけり

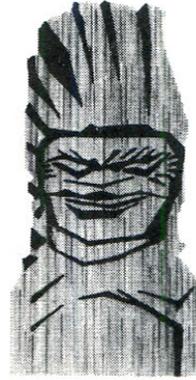
『成瀬櫻桃子俳句選集』平成十二年

敦先生の十三回忌の年の万太郎忌の一句で、春燈の三代目主宰としての、先師お二方の名前入りの句ともなっている。中七の「敦の牡丹」が何んとも出色で、それが奇しくも万太郎忌に開花したというのです。

敦先生にはへ牡丹ひらくすなはちこの日師の忌にてへなど、昭和四十五年に牡丹の句が五十六句もあることから、櫻桃子先生は「敦の牡丹」と詠われたのでしょうか。

栗原完爾

燈下集



○ 横田初美

むらさきに明けゆく沖や残る虫

白亜紀の風の岬や新松子

流木は渚のオブジェ文化の日

秋うらら緋の夜具干して釣の宿

かばかりの魚干し村の暮秋かな

○ 沼田桂子

こぎざみに草木の揺るる今朝の冬

冬木道こころ晴れ晴れとほりけり

毛糸編み閑かな時を手繰り寄す

さむき夜はねむる形をまるくして

神の旅行きつく果の見え隠れ

○ 秋場貞枝

鼯鼠の鳴くてふ山の宿古りし

穂芒の光の波や石仏

首無しの野仏纏ふ蔦紅葉

蛇穴に入るや天城の風白き

異人坂風に彷徨ふ秋の蝶

○ 佐渡谷秀一

獄門を悼む碑大秋の風

奥ひろき足袋屋の跡地新松子

金木犀過ぎ去りし日の香なりけり

群れ鳥の声去り秋日残りけり

はふはふと口尖らせりふかし諸

○ 宮田豊子

檸檬の香くりやの朝を満たしけり

欠席通知出すこと増えて秋深む

大の男の頬ゆるみけり栗羊羹

そぞろ寒崩し字で書く追而書

十三夜褒め合うてゐる茶席かな

○ 佐々木新

雛僧の作務衣の袖の赤い羽根

オホーツク能取岬のに馬肥ゆる

柿ひとつ残して暮るる殉難碑

秋の日を床屋に昔語りかな

長月やネットの旅に夜の更くる

○ 呂秀文

いづれゆく道にしあれど枯野行く

敬老日追はれて消ゆる先の波

紅葉見ぬ熱帯の森やロープウェー

吾亦紅赤き旗抱テハオ着て闊歩

蛇穴に濁世なれども未練げに

○ 呉文宗

初嵐風音迫る片荒し

唐辛子渋面険しく干し上がる

宙に浮かぶ廟の唐破風秋の昼

朝寒の腓返りや黙に堪へ

身に入むや膝ゆ腓へ年拾ふ

○ 陳妹蓉

ばたばたと厨の朝や休暇明

本の帯を大事にたたみ文化の日

刃の立たぬ南瓜のお化けハロウィン

ラベンダーのシャボンの土産敬老日

葬列の遺影の笑顔秋深し

○ 井上正子

予感ありし訃報届くや秋の蟬

流木を洗ふ秋波義姉逝けり

五万石の貧しき城下秋祭

卒寿の友の Aria 独唱冬薔薇

獭銃音獣も人も血は赤し

当月集

安立 公彦選



○ 藤原若菜

訥々と花の名言へり花野守

桐の実や風出で来たる昼下り

魯田に山の陰りの被さり来

連れを呼ぶ鳥声身に入む夕べかな

行く秋や老いたる猫を身ほとりに

○ 矢口笑子

鱗雲群るる事にも厭きにけり

飛び出して展く未来や蓮の実

舌を出すアインシュタイン文化の日

日溜りに干されし産着柿の秋

背中合せに座るベンチや冬隣

○ 川崎真樹子

沖荒れて焚火を囲む漁夫の黙

気塞ぎの一日の無駄や冬の雲

冬薔薇競ふものなき孤独かな

冬三日月街に迷子の異邦人

壺少し動きし気配神の旅

○ 都丸美陽子

ななかまど信濃の空の深きかな

乳色の霧の匂ひの村に入る

走り根にかばふ足元木の実降る

天平の仏にまみゆ秋うらら

美術展盲導犬のあくびかな

○ 加藤千春

鈴虫と突きし日もあり青春期

ほのぼのと老ゆるを願ふ秋夕焼

したたかに生きし日もあり吾亦紅

控へ目のおもむきが好き実むらさき

栗飯を炊いて吾子待つ夕べかな

春燈の句

安立 公彦選

遠景や津波逃れし稲架襖 (三陸四句)

東京 佐藤 玲子

復興は遅々立枯れしままの秋

立枯れの里なり紅葉降りられず

懇ろにねんごろに磨ぐ今年米

秋雨や楽譜に残るめぐり跡

追伸に記す恋の句秋うらら

流星や横たはりたる荒筥

献杯のボージョレーヌーヴォー星揺るる (悼)

夜なべ終ふ月たかだかと上がりけり

トーストにバター染みこむ寒露かな

身に入むや夫の余白の日記帳

秋風につつまれ仰ぐ仁王門

赤城晴裏木戸に笑む椿の実

稲の穂の音して乾く日和かな

埼玉 茂木 なつ

縁小春お尻干す嬰をうら返す

神還る地産の馳走盛り沢山

目が合うて胸を差出す赤い羽根

ふたりして虫喰ひ仕分け栗おこは

晩秋や古書店まつりオムライス

家苞に汲む名水や照紅葉

身に入むや有島武郎自死の部屋 (軽井沢)

旅了へてひと日を無為に小春かな

山茶花やうから揃ひて墓に住む

誰となくなんとなくをり日向ぼこ

吾亦紅活けて父の忌修しけり

ビル越えてゆく飛行船秋曇

さはやかに旅の日程きまりけり

秋澄むや音高く湧く御膳水

千葉 小淵二美江

長野 藤丸 誠旨



余言

安立公彦

猿酒醸しては樹の老いにけり

片桐てい女

軽井沢勉強会でこの句を見て心うたれるものがあつた。自然の摂理を言い止めている、と言えば理屈になるが、理屈を通り越して、この句には頷く思いが深い。同時にこういう季語を俳句という短詩のために選んでくれた先人の心ばえに感謝の思いが湧いた。

同時発表の、へ旅なれば秋思の髪を手櫛に梳きもみごとだ。「秋思」の思いが瑞々しく表現されている。作者の句には常に「心の若さ」が一本の芯となつて通つている。

ここまでは日差しとどかぬ落葉道

近藤 牧男

久保田先生の戦中の句に、へ秋立つとしきりに栗鼠のわたりけり〜という軽井沢での作がある。秋の勉強会は十月三十

日、三十一日の両日。季節はすでに立冬を旬日に控えている。駅前の六本辻を過ぎると、別荘地の街路には、例えば「ささやきの小径」などの名を冠した道が直線状に走る。どの道も時を経た街路樹が天を突くばかりに聳える。大方は白秋が詠つた落葉松だ。道に立つとその落葉松の梢の間に、晩秋の空が長く伸びているのである。

この句、そういう風景を巧みに表現している。久保田先生の頃は、それらの木立に栗鼠の姿を見ることが出来たのだろう。同時発表の、へ落葉道歩く早さで暮れて来し〜、へ月光を浴びて来し服まだ脱がず〜も善い。

身に入むや主なき書庫の本の数

岩永はるみ

軽井沢勉強会の見どころの一つに、室生犀星、堀辰雄の記念館があつた。双方とも故人が住んでいた別荘跡地。

堀辰雄が初めて軽井沢を訪れたのは、年譜によると大正十二年とある。室生犀星に伴われてこの地を知る。昭和六年犀星は軽井沢に別荘を新築。辰雄が軽井沢に住むのは昭和十三年のこと。加藤多恵と結婚し別荘を借りて新居とする。辰雄はその後、昭和二十六年に信濃追分に新居を建て移り住む。これが現在の堀辰雄文学記念館である。しかし二年後の昭和二十八年五月二十八日に死去。堀辰雄はこの終焉の地に一年十か月しか住めなかつたことになる。

この句にある「書庫」は私たちが訪れたとき補強工事の足場が架かつていた。この書庫が出来上がったのは、辰雄の亡

くなる十日ほど前という。すでに病床に臥したままの辰雄は、双眼鏡でこの書庫の内部を見ながら、書棚に本の収まるのを愉しみにしていたが、それを見ることなく他界したとのことである。そういう思いでこの句を見ると、「身に入む」がひとしお哀切に響く。「本の数」は作家の書架としてはむしろ少ない。そこにこの作者の堀辰雄への思いの深さが感じられる。

霧込や三笠ホテルの夜会の灯

田嶋 洋子

勉強会の初日は雨だった。立冬には十日ほど間があるが、軽井沢に降る雨はまさに時雨だ。その雨の中を着いた三笠ホテルの外観は、現代建築には見られない意匠の希有さに包まれていた。しかしその希有さは軽井沢の杜を背景にみごと存在感を示している。ホテルの年表によると、落成は明治三十八年、戦後一時進駐軍に接収されるが、その後昭和五十五年国の重要文化財に指定され現在に至る。

掲出句の「夜会の灯」は、明治の末から戦前にかけての地に別荘を持つ社交界の宴の灯である。暖炉の設えた壁際、格天井から吊された幾多のシャンデリア、装飾された柱。どの一つを取っても、建築当時の意気込みが伝わってくる。この句、名詞を連ねただけの表現だが、一読華やかな宴の灯火が浮かんで来る思いがする。

櫛田に山の陰りの被さり来

藤原 若菜

勉強会の二日目は快晴だった。帰路車窓には浅間の山容が南面の目を浴びて雄大な姿を見せていた。作者は勉強会には参加していない。しかし投句の中にこの句を見て、車窓から見た浅間山を思い出した。この句のような景はどこにもある。ただ普通には見逃しているだけだ。普遍性を持つ句は普通には見逃すような景の中にこそ潜んでいる。

冬薔薇競ふものなき孤独かな

川崎真樹子

作者の句には常に繊細な感覚が読みとれる。その繊細さも同時発表の、〈壺少し動きし気配神の旅〉の場合は、かすかな滑稽感を伴い、同時に句を見る私たちにも鑑賞のゆとりを与える。句の優劣ではない。繊細な感覚の方向性の問題である。個性と言っても良い。しかし「孤独」は私たちにとって、常に何らかの形で従属するものだ。

懇ろにねんごろに磨ぐ今年米

佐藤 玲子

「三陸四句」の前書がある。作者は東日本大震災の跡地を尋ねたのだ。震災を悼む句は多いが、その地に足を運び惨状をわが身に感じた句は少ない。それだけにこの句の「懇ろに」には説得力がある。この行動力は貴重だ。